

地域経済をリードする 産業栽培メディア

e-コロンブス9月号増刊  
昭和50年3月26日第三種郵便物認可  
平成24年9月10日発行 通巻567号

# コロンブス

MONTHLY COLUMBUS

ビジネスの新大陸を発見!!

9

2012

SEP.

680円

本誌編集長と20名の地域おこしの達人たちが選ぶ

混迷する時代を  
生き抜くための知恵と  
ノウハウが満載!!

# 地域おこしの必携本

【大地の顔】

有機生姜に挑みはじめた  
有機栽培のスペシャリスト

飯田幹雄・有機農家

【地回り経済対談】

葉山に惚れ込んだ  
若手町長が  
行財政改革に挑戦

山梨崇仁・葉山町長

アジア進出の達人

【池田博義のGlobal Channel】

中堅・中小企業支援の  
トップコンサルティング

ファームを目指す

針原カ・AGSグループCEO

【ニッポンのモノづくり通信簿】

「せんべい、おかき、あられ」の  
米菓製造機のトップメーカー

新井進二・新井製菓製作所代表取締役社長

## ニッポンが誇る百年企業の底力

【特選銘柄】

百年企業の「老舗商法」から  
地域再生のヒントを学べ

前原金一・経済同友会副代表幹事・専務理事

【地域経済レポート】

「老舗力」を分析できる  
「企業生命力スケール」の仕組み

竹田茂生・関西国際大学人間科学部教授

【百年商法】

カツオ一筋の老舗企業が  
医薬バイオ向けの培地素材を開発

村松憲行・マルハチ村松代表取締役社長



字引として活用することができる。同じく40年以上前に発行された『日本の商圏 新しいマーケティングマップ』も一度は手にとってほしい一冊。商業地理学を基調に産業分布や住民性など平成の新商圏を知る手掛かりを満載している。

地域経済をいかに活性化するかといったときに、まず頭に浮かぶのが産業を創出することだろう。だが、この厳しい時代にどうやって新しい産業を創造すればいいのか。そんな問いに答えてくれるのが『地域産業の活性化戦略』イノベーター集積の経済性を求めて〜だ。本誌で「ニッポンのモノづくり通信簿」を連載中の野長瀬裕二教授が、企業訪問や異業種交流を実施しつづけてきた末に見出した地域産業活性化のロジックが記された書だ。やや学術的な側面もあるが、野長瀬教授らしい実践を重視するリアリティに溢れた検証がなされている。

中山間地域の活性化も大きな課題となっているが、その際にポイントになるのが耕作放棄地などをどうするかといったこと。というわけで、紹介したいのが『里山・遊休農地を生かす新しい共同＝コモンズ形成の場』だ。本書は里山の歴史、素晴らしさとともに、入会慣行による共同利用など、里山ならではの制度を紹介。と同時に、都市の住民が里山とどのように交流し、里山を保全していくべきかを提案する。中山間地域の活性化を目指す際には必携の一冊といえるだろう。

転じて、ここ最近では地域ブランドと

いう言葉を耳にすることが多いが、果たして地域ブランドの効力とはどのようなものなのか、そしてその力を引き出すにはどうすればいいのだろうか。そういう意味では、最近、ご当地キャラクターがブランド化に欠かせない要素になってきた。実際、熊本県の「くまもん」はそのキモかわいさで、いまや全国区のキャラになっており、大いに地域のPRに貢献している。そんなご当地キャラのことを知るのに最適なのが『ご当地キャラクター図鑑』。地域別にさまざまなご当地キャラクターが掲載されており、その多様性に思わずビックリしてしまうこと間違いナシ。ご当地キャラを考察するときには是非とも目を通しておきたい。

ところで、最近では地域おこしの現場でも社会的なニーズを汲み取ったソーシャルビジネスが注目を集めているが、その際に大きな役割をはたすのがNPO法人だ。とくに認定NPOになると寄付優遇税制の対象になることができ、より社会的な事業を展開しやすくなる。というわけで、ここでは『成功する！NPOビジネス 設立・運営からパブリックビジネスでの成功まで』と『金融NPO—新しいお金の流れをつくる』をオススメしたい。前者はNPO運営に関するノウハウやコミュニケーションの進め方を記しており、後者は地域内で必要なチャットしたお金を工面する金融NPOの活躍ぶりや重要性を記している。いずれもNPO法人で地域おこしに取り組み際の必読書といえるだろう。(古川猛)

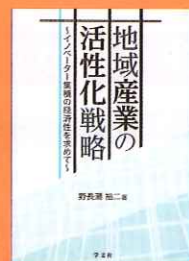
本誌編集長推薦  
地域おこしに「効く」本



「1時間でわかる図解 日本のデフレ早わかり」戸崎肇／中経出版



「日本の商圏 新しいマーケティングマップ」室井鉄衛／ダイヤモンド社



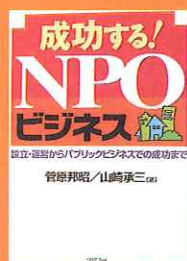
「地域産業の活性化戦略～イノベーター集積の経済性を求めて～」野長瀬裕二／学文社



「里山・遊休農地を生かす 新しい共同＝コモンズ形成の場」野田公夫、高橋佳孝、九鬼康彰、守山弘／農文協



「ご当地キャラクター図鑑」ご当地キャラクター図鑑制作委員会／新紀元社



「成功する！NPOビジネス 設立・運営からパブリックビジネスでの成功まで」菅原邦昭、山崎承三／学陽書房



「金融NPO—新しいお金の流れをつくる」藤井良広、岩波新書



# 地域おこしの達人が選ぶ 20冊の必読本

本誌に登場したことがある地域おこしの達人たちに「地域おこしに役立つオススメの一冊」を選んでもらった。是非ともこれらの本を読み込んで、地域おこしに取り組んでほしい。



1. 『地域再生プロデュース—参画型デザインニングの実践と効果』 蓮見孝／文眞堂

著者は91年に日産自動車から筑波大学に転任してから20年、長く茨城の地域おこしに関わり、多くの事例を成功（とたぶん多くの失敗）に導いた人物。茨城県内にて「まちづくり」に関わる人たちの間では知らぬ人のいない存在である。本年4月に筑波大学を退官し、札幌市立大学の理事長となっているが、筑波大学時代には面白くてためになる授業を行う名物教授として「学生から人気の講座ナンバーワン」の評価を受けている。

何より、本書には時代潮流の芯をとらえる大きな社会学理論やデザイン論があり、そして現場と実践にこだわり、具体的に地域を「デザイン」するといったノウハウが満載されている。地域おこしの実用書といえる。

是非、旧著の『マルゲリータ女王のピッツァー—私たちの発想論』もあわせて読んでほしい。



1  
茨城大学産学官連携イノベーションセンター 創成機構特助教授  
赤津一徳



2. 『地域主権の近未来図』 増田寛也／朝日選書

地方分権についての本は多々あるが、本書は前岩手県知事、元総務相として地域の現場と行政について知りつくした著者が、地域主義の本質を述べつつ、地域をどのように活性化するか、現実に即した問題提起をしている点で際立っており、地域にかかわる多くの人にとって示唆に富むものと思う。朝日新聞の菅沼栄一郎氏が編集協力しているために読みやすく、変化に富んだ構成になっている。地域主権の理論付けと提言、各地での地域おこしの具体的な動きを紹介していて、コンパクトであるが教えられることが多い。岩手県知事としては、郷土の大先輩・後藤新平の「自治三訣」を標榜しつつ、自動車産業の誘致、青森・秋田県知事との協力関係構築、限界集落対応などに苦労を重ねた実績の上での提言だけに、どれも説得力がある。税金についての考え方は現実的だし、家計と違い地方財政は「出づるを量りて入るを制す」でなければならぬというのは至言と思う。片山善博氏との対談も面白い。



2  
社団法人経済倶楽部理事長  
浅野純次



3. 『未来のスケッチ 経営で大切なことは旭山動物園にすべてある』 遠藤功／あさ出版

「行動展示」という画期的手法で一躍有名になった旭川市の「旭山動物園」を題材に、企業経営や地域づくりに必要な視点を解き明かした書。

「旭山動物園のような『成功事例』は、多分に偶然的な産物であって、そこに普遍的な『成功方程式』を見出すことはできない」という声もある。たしかにそれも一理あるが、この動物園を成功に導いたのは「すべてが運」ではないはず。論理学的思考に立てば、成功事例にはかならずや成功に至るための必要条件、必要要素が含まれているものである。

本書には「成功方程式」こそ描かれてはいないものの、地域づくりに必要な、あるいは事業を成功に導くための「ヒント」が散りばめられている。地域づくりに携わる人たちは、それを読み解き、利用すれば良い。とくに「環境変化に対応し、次の時代のスケッチを描き続けることが重要」という示唆は、事業継続を目指す企業経営者にとっても必要な視点だろう。



3  
CCJ常務取締役  
今泉道雄

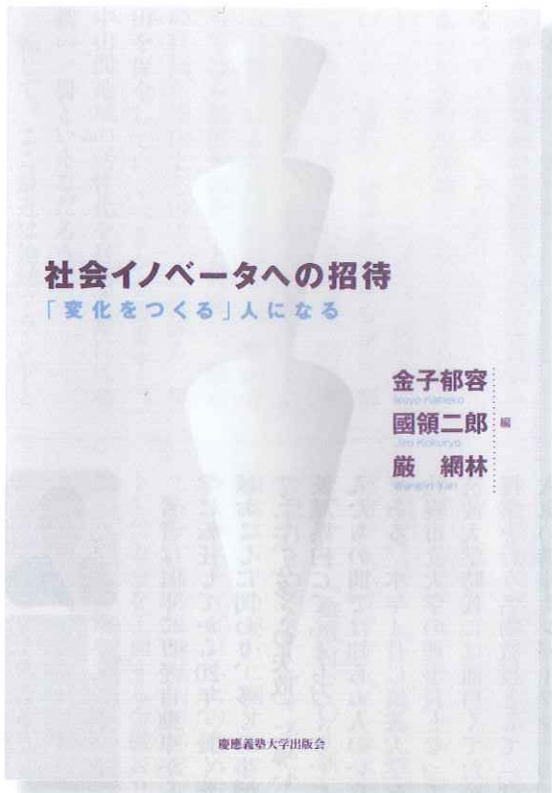




4  
関幸子  
口十力ルネイネット研究所所長

日本の高度成長期に大手日本企業の経営手法を調査して、知識社会における知識の重要性を解明した経営学の名著。著者の野仲氏はとくに日本企業のマネージメントに着目し、経験としての暗黙地と数値化できる形式地の両方を取り入れてきたことが、日本の企業経営の優位性と指摘している。あわせて、知識を創造できるのは個人であり、それを支えるのが組織であるとし、個人の発想や行動を重要視している。

本書は企業経営論でありながらも、地域おこしやまちづくりに適合し、通じる点が多い。地域おこしの原点は課題の発見であり、その後に課題をどの



5.『社会イノベータへの招待「変化をつくる」人になる』金子郁容、國領二郎、巖網林／慶應義塾大学出版会



5  
後藤俊夫  
日本経済大学教授

ような手段で誰が解決するのかというプロセスが生まれる。まさにその過程は本書で語られる企業プロジェクトの動かし方と同様である。本書は混沌や混乱を経ることによって、人間は知識を生み出し、組織がまとまっていくとしているが、それもまたまちづくりへの示唆となるだろう。

地域活性化にもっとも重要な「ヒト」、なかでも「想い」という2要素について述べているので、紹介したい。近年注目されているソーシャルビジネス、ソーシャル・アントレプレナーに対する回答が示されている一冊だ。



6  
佐藤洋平  
中山間地域フューチャラ理事長

著者の本書執筆の意図は明確である。「どんなに立派な箱物や器を造っても、潤うのは一部の利害関係者だけで、地域に暮らす人々は幸福果実を手にしていない」ということを伝えようとしている。箱物行政を支える土建工学者などの専門家に対し、「土建工学者などの地域再生の専門家の成功基準は、箱物の建設、つまり土建行為そのものにある」「箱物を造れば成功とみなす彼らは、建設後の箱物が有効活用されているかどうかを検証しない」と厳しく糾弾する。地域再生プランナーとして、民間都市開発の研究に携わるなかで得た多くの地域再生に関する事例のなかから、地域再生における「罨」とそのカラクリを解き明かしつつ、地域再生のためのビジョンの提示や具体の提言を述べている。



7  
香川晋平  
香川会計事務所／公認会計士

千葉商科大学の学長、島田晴雄先生が地方発ビジネスの戦略と事例について紹介した一冊。島田先生は「大都会に住んでいる中高年者により豊かな生活を提供することが、地方の唯一の成長戦略」と断言し、具体的に地方発のビジネスをどうすすめていくべきかを、みずから関わった事例をもとに解



8  
増田紀彦  
株式会社法人経営支援センターワークス NPOe 代表理事

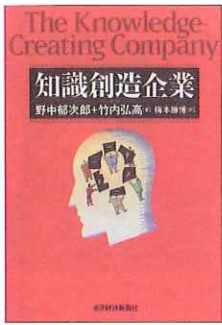
説する。そして、コミュニティビジネス成功のためのポイントは①共感を持つ人々をグループ化する②リーダーとサポーターを決める③小さく産んで大きく育てる④成功談を広めて人を巻き込むの4つとする。

また、5年間で本州から12000人もの人を移住させることに成功し、地価上昇率で全国トップに輝いた北海道伊達市、自然体験ビジネスを軌道に乗せた長野県飯田市、若者の仕事を増やすことに成功した沖繩など、実に興味深い事例も紹介されている。地域おこしに非常に役立つ一冊だ。

本書は島根県の中山間地域の産業をモデルにして、課題や取り組み、成果などを丹念な調査にもとづき、詳細に報告している。何と600頁超の大作である。そこまで深く掘ったがゆえに、本書は島根県という枠にとどまらず、過疎化・高齢化・人口減少・産業衰退に悩める全国の中山間地域の構造改革に、有用な普遍的示唆を与えている。

あくまで農林畜産業という伝統的な産業を基盤にしながら、川下（流通・販売）展開の変革に活路を見出した事例の数々は、まさに目からウロコが続である。私自身、新潟県中越地方の中山間地域の産業活性化に取り組むなかで、本書の視点を大いに活用させていただいた。





4.『知識創造企業』野中郁次郎・竹内弘高／東洋経済新報社



6.『地域再生の罫』久松哲之介／筑摩書房



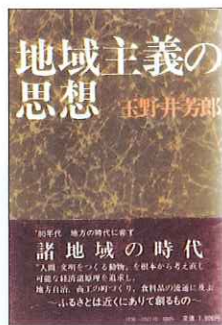
7.『成功する! 「地方発ビジネス」の進め方』島田晴雄・NTTデータ経営研究所／かんき出版



8.『中山間地域の「自立」と農工商連携』関満博・松永桂子編著／新評論



9.『ダメな商店街を活性化させる8つのポイント』鈴木健介／同友館



10.『地域主義の思想』玉野井芳郎／農文協



11. 季刊『日本主義』／白陽社



12.『東海道中膝栗毛』十返舎一九／岩波文庫

地域おこしの具体的な課題に取り組むには、その基礎となる拠って立つ思想的基盤がシッカリしていないといけない。著者の玉野井氏は今より30年以上も前に、いち早く地域主義を標榜し、市場志向からの脱却、生態系の重視などを基盤とする新たな経済学（広義の経済学）を提唱した。著者はこの本のなかで「1980年代はきつと新たな学問の時代―近代を超える学問が勃興するだろう時代―として特徴づけられるようになるであろう」と述べているが、さて、どうだったであろうか。今、ようやく、著者が当時考えていたことを社会が理解できるようになったので



10  
月刊「日本主義」編集長  
並河信乃

商店街が活性化しない理由が簡潔に、わかりやすく項目ごとに書かれた本。お客様の満足度を中心に、本来あるべき商業活動の姿を解説している。理論的に8つのポイントをあげながら解説しているのも、非常にわかりやすく商店街を活性化する術が見えてくる。私自身もコメントを寄せているが、大変共鳴できる内容になっている。また、商店街活性化が地域の大きな課題となるなか、実にタイムリーな一冊といえる。



9  
戸建産屋敷六商店街振興組合理事長  
亀井哲郎

1802年(享和2年)から1814年(文化11年)にかけて初刷りされた、東海道の風俗・名物を背景にして展開する滑稽本。鞠子のとろろ汁、桑名の物焼蛤をはじめ、今でもその影響は大きい。地域おこしの成否は読者(お客)をいかに楽しませ、参加させるかで決まると思う。そして、何よりも地域の人自身が楽しむことが必要だろう。



12  
茨城の字紙三元梅堂長  
札幌靖人

数ある雑誌のなかでも、この本を取り上げる人は少ないと思う。地域おこしのスタートはご当地自慢であり、そのキーワードは地域に根ざした文化、歴史、伝統、そして人など、多岐にわたる。ここであげた『日本主義』はその名の通り、日本各地における人物を取り上げ、背景となる歴史的つながりや時代性を今日の視点から論考している。地域おこしのキーマン、キーマンが「人財」となり得るために、知っておきたい情報を提供してくれる良書だ。



11  
千葉大学大学院都市環境システム学  
科准教授  
佐藤建吉

はないだろうか。混迷する今の日本で、もう一度原点に返って、この本を読み直す必要があると思う。